

フィロロジスト Dr ジョンソンの言語観

— *ascertainment* の概念に関連して —

大森 裕 實

Reconsideration of Johnson the Philologist's Attitude towards the English Language with Reference to the Concept of *Ascertainment*

Yujitsu OHMORI

The aim of the present paper is to explain some prominent characteristics in language perspectives of Samuel Johnson being referred to as the greatest man of letters in the Age of Reason, not in the light of literary style but from the philological viewpoint. In the 18th century, in England, there emerged a movement to establish the Academy of Language, which was expected to hold back the corruption of the English tongue and fix the standard in the form of its best. On the scale of language purification and standardisation in the history of the English language, Jonathan Swift is regarded as an absolutely ambitious intellect for the Academy at one extreme, while at the other is Dr. Johnson who seems to have changed his mind to the practical attitude towards restricting the English language by some proper instructions illustrated in grammars and dictionaries used among the populace, from the prescriptivism of the national authorities. Making a careful survey of his descriptions in the Plan and the Preface to the Dictionary as well as a comparison among OALD⁶, OED², and Johnson's Dictionary (1755) of the definitions of critical words which would give us a clue to more understanding of the contemporary ideas about language, such as ascertain/ascertainment, corruption, purify, etc., this thesis makes clear that Johnson's thought and attitude as a pragmatist full of insight is different

from that of advocates for the Academy such as Dryden, Defoe and Swift at his time. Samuel Johnson surely qualifies for the name by which the philologist should be crowned: the lover of *logos*.

序

言語が不斷に変化するという経験的事実については異論のない眞理には違ひないが¹⁾、それを墮落とみる言語純粋主義者や規範文法信奉者が存在する一方で、変化を事実として受忍する現実主義者や記述文法家もある。本稿で採りあげるサミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson: 1709–1784) [通称 Dr. Johnson] は、18世紀イギリスの文豪にして、後代のOEDをはじめとする英語辞書の雛形ともなった *A Dictionary of the English Language* (1755) を (6名の助手を使ったとはいえ) ほぼ独力で編纂し²⁾、この『英語辞典』がイギリスにおいて実現されなかつた「英語アカデミー」を実質的に代替する役割を果たしたことで人口に膾炙している。英語の「外面史」に十分な記述と配慮を施した Baugh & Cable (1951, 2002⁵⁾) *A History of the English Language*, Ch. 9: The Appeal to Authority, 1650–1800にはその辺りの事情がよくまとめられており、当該分野の知識を必要とする者に有意義な情報を提供してくれることは幸いなことではあるが、それをすべて無批判に甘受することもできないことは Baugh & Cable の『英語史』に限ったことではない。例えば、Bradley の『英語の成立／英語発達小史』に記載されたことにより、ノルマン人の征服以後の英国において「生きている時は ox/sheep/calf/swine/deer (Saxon) で、死んで食卓にのぼると beef/mutton/veal/pork/venison (French) と呼ばれる」といった Sir Walter Scott, *Ivanhoe* (1819) からの引用が、当時の二言語併用状態を正確には伝えないまま、しばらくはまことしやかに語られることになったというのは記憶に新しい。

ところで、最近流行の大規模電子コーパスを別にして³⁾、英語に関するデータベースとして最終的に拠るもの一つあげよと英語関係者に尋ねてみれば、*The Oxford English Dictionary* (第2版, 1989) が第一位を占めるであろうことは想像に難くない。アメリカ英語と百科辞書的要素に関心が深ければ、*Webster's Third New International Dictionary* (1961)

をあげるものもあるかもしれないが、「^{ことばてん}辞典」としての OED（年記者には旧称 NED の方が馴染みが深い）にはそれ程の信頼がある。しかし、実際に現存する literature からの典拠を明らかにして語義を記述する方法は、一般の想像を超えた至難の業であり、OED 初代の編集主幹であった James Murray について書かれた『ことばへの情熱』（原著 *Caught in the Web of Words*）や近刊の『オックスフォード英語大辞典物語』（原著 *The Meaning of Everything*）から窺い知ることはできるものの⁴⁾、この趣の文献学的辞書編纂法が OED に 170 年も先行して上梓された *A Dictionary of the English Language* (1755) [8 年の歳月を費やして、事実上独力で編まれた収録語数 40,000 語の本格的辞書] に拠ることは、英語文献学や辞書編纂学を専門にする人以外には広くは知られてはいない。

このように、S. ジョンソンといえば、従来から英文学史上の巨人として、隨筆誌 *The Rambler* (1750–1752) や長編散文小説 *Rasselas* (1759)、Shakespeare 全集編纂 (1765) で知られる存在であることは言を俟たないが、英語史・英語学史に視線を転じてみると、辞書編纂者として重要な位置づけは結果的にはなされはするものの、言語学者・英語学者としてのジョンソンの輪郭はそれほど明瞭なものとはいえない。さらに、Sledd & Kolb (1955) の指摘のように、『英語辞典』の編纂が時代の要請に応えた出版業者主体の企画であり、そこには何の新機軸も提示されていないとする新見解が著わされるに至っては、ジョンソンがどのような言語観をもち、どのような言語史観で辞書編纂に取り組んだかについて、一般に流布する定説に縛られずに再検証することが必要となる。氏の言語観を分析することは、「英語アカデミー」の思想に対する心的態度の動搖とも関連して、有意義な研究であるにもかかわらず、ともすると看過される傾向のあったことは否めない⁵⁾。

そこで本稿では、ジョンソンが『英語辞典』のなかで定義した *ascertain/ascertainment* という語彙の概念的意味を手懸かりに、英語の規格化・規範化に対する氏の心的態度を『英語辞典』に掲載した「序文」(Preface to the *Dictionary*) とそれに先行する『企画書』(The Plan of a *Dictionary*) から再検討するとともに、それを傍証するものとして、「英語アカデミー」の設立と英語の固定化に熱心に取り組んだジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift : 1667–1745) が 1712 年に当時の大蔵卿オッ

クスフォード伯に宛てた建白書 *A Proposal for Correcting, Improving, and Ascertaining the English Tongue* 『英語を矯正・改良・確定するための提案書』に記載したいいくつかのキーワードの概念をジョンソン『英語辞典』の定義を参照しながら読み解くという新しい手法も併せて試み、これら一連の過程を通して、Dr ジョンソンの言語観を考究する。

現代英語事情と言語アカデミー思想の逆説的関係 ——Dr ジョンソンの予見性——

21世紀を迎えた現代社会において、「英語」は今や英國の言語／米国の言語といった観点からでは十分にとらえることができない *lingua franca* として、かつてラテン語がヨーロッパ世界に占めたのと同様の、あるいは言文一致という側面を考慮すると⁶⁾、それを超える浸透力で、ますますその重要性と存在価値を高める傾向を示している。そのことを一般に広く知らしめた書籍は Penguin Books (初版は Pelican Books) の一冊として上梓された David Crystal (1988) *The English Language* [『英語——きのう・今日・あす』 豊田昌倫訳, 紀伊國屋書店, 1989] ではなかったかと思う。Crystal (1988) では、「母語」以外の存在としての「第二言語としての英語」(ESL) と「外国語としての英語」(EFL) の位置づけと実態が見事に描き出されていたが⁷⁾、そこには最近よく聞かれる「国際語としての英語」(EIL) という術語は看取できなかつた。しかしその後、Crystal (1997) は一步進めて、EIL相当を「地球語としての英語」(EGL) と命名する。さらに、Braj Kachru の提唱する「世界諸英語」(World Englishes: WE) は今では市民権を獲得しつつあるといつてもよい⁸⁾。インドの人口のわずか10%が英語話者であると仮定しても、その約1億人という数字がイギリスの母語話者数(約5600万人)を遥かに凌駕することはもはや驚くような新奇な事柄でもなく、Kachru の “inner circle” に属する米国以外の国々の人口を総計しても1億人には到達しないのが現状である。

このように「英語」が EIL/EGL となるには、言語内部の要因と言語外部の要因が巧みに相乗効果を産出した結果であるということができよう。第一に、言語内部の要因とは、大きな言語接触を何度か経験した英語のもつ「他言語に対する寛容な姿勢」と「造語力 (word coinage) の強さ」に

象徴されるであろう。英語語彙におけるフランス語からの借入語彙の占める割合の多さをはじめとして、他言語からの語彙（内容語：content word）の借入に極めて寛大であると同時に、北ゲルマン語（Vikings = the Danes の言語 Old Norse）からは *they* や *from* といった機能語(function word) まで取り入れる寛容さが窺える。一方、造語力の強さについては、語形成にさまざまな手段を発達させたことがあげられる：①派生 (derivation)；②合成／複合 (composition)；③混成 (blending)；④頭文字 (acronym)；⑤省略／切り株 (abbreviation)；⑥逆成 (back formation)；⑦固有名詞の一般化 (base creation) [擬声語 (onomatopeia) を除く]。また、第二には、言語外部の要因として、言語使用域の政治的影響力を別にして、「言語政策」の無作為を指摘することができるであろう。イギリスにおける良い意味での個人主義・実際主義・現実主義が、自国語の純化を目的として16世紀のイタリアや17世紀のフランスに設けられたものと同趣旨の「言語アカデミー」の設立を容認し得なかったのである。

結果として、このことが英語の多様性を産出し、逆説的にも、意思伝達に支障のない共通言語共同体を構築したといえる⁹⁾。その意味では、「英語アカデミー」について、初期の（文筆家としてはほとんど評価していなかつた）スヴィフトに同調したようなアカデミー肯定派から、『英語辞典』編纂の段階ではアカデミー否定派に転向したジョンソンの予見性は特筆に値する。事実、『英語辞典』の「序文」のなかでは現実主義的態度を明らかにし、「万ーアカデミーが設立されるようなことがあれば……権威への隸属が増大することを望まぬ私としては、イギリスの自由の精神がアカデミーを阻止し撲滅することを望む」と記した¹⁰⁾。

Johnson's Dictionary (1755) 編纂の背景

本節では、Baugh & Cable (2002⁵) と小島 (1999) の記述を参考にして、ジョンソン『英語辞典』が誕生する社会的背景と時代の要請について、その概略を簡潔に記しておくことにする。

ジョンソンの『英語辞典』編纂企画の意図は、理性の時代18世紀英國における言語アカデミー思想と国語純化運動に影響を受けたものと一般に考えられている。英國に先行して17世紀イタリアでは、1582年に創設されたクルスカ・アカデミー (Accademia della Crusca) がイタリア語統

一のために編集・刊行した *Vocabolario degli Accademici della Crusca*『クルスカ・アカデミー辞典』(1612) が存在し、これはトスカーナ地方のことばを中心に14世紀の文人達からの出典を明記したものであった。またフランスにあっては、国王ルイ13世の勅命を受けて、1635年に枢機卿リシュリューによって結成された40名程度の研究グループがフランス・アカデミー (*l'Académie française*) へと発展し、フランス語の純化を目的として *Le Dictionnaire de l'Académie française*『フランス・アカデミー辞典』(1694) が出版されるという情勢にあった。この欧州大陸の言語アカデミー運動に触発されて、英語の綴字法、語法、文法を純化し保持しようとする動きが著名な文学者のなかに起こった。特に、ドライデン (John Dryden)、ポープ (Alexander Pope)、アディソン (Joseph Addison) の他、デフォー (Daniel Defoe) は1697年に *Essays upon Several Projects*『諸案試論』のなかでアカデミー問題を正面から取り扱い、その必要性を説いた。この間、1662年には英國学士院 (The Royal Society) が設立され、1664年には英語改良委員会 (The Committee for Improving the English Language) が設置されたが、ドライデンもデフォーも満足してはいなかった。デフォーは『諸案試論』のなかで「我々にとっては、このような事業（アカデミーの設立）を始めるにはフランス宰相リシュリュー (Richelieu) のような人物が必要であるが、その理由は、我が国においてこのような天才がいて皆を導いてくれるなら、これまでの先行事業にひけをとらない見事なものに仕上げる有為の人材にはこと欠かない信じて疑わないからである」と述べ¹¹⁾、指導者の出現を期待している。当時の英語問題に関心を寄せる文学者の文献には、腐敗 (corrupt) や英語を永遠に固定化する (fix the English language for ever) という文言が看取される。

さらに機の熟した1712年には、前述のように、スウィフト (Jonathan Swift) が大蔵卿オックスフォード伯に宛てた建白書 *A Proposal for Correcting, Improving, and Ascertaining the English Tongue*『英語を矯正・改良・確定するための提案書』を著わす。この時期が英國における言語アカデミー運動の最盛期といってよい。さまざまな議論を呼んだ後、アン女王の逝去 (1714年) により言語アカデミー設立の計画は頓挫することになる。スウィフトは『提案書』のなかで、「……英語は極めて不完全であり、日々の改良は日々の退廃にとうてい追いつかず、英語に磨きをか

け洗練すると偽り称している輩が中心となって誤用とばかげた語法を倍加しており、数多くの事例において英語は文法のすべての分野に違反しているのであります」とオックスフォード伯に嘆いてみせるが¹²⁾、このなかでス威フトは、改良 (improvement)、退廃 (corruptions)、洗練 (refine) といった語句を選択的に使用する。アイルランド帰国後、失意の時期に著わしたとされる『ガリバー旅行記』(Gulliver's Travels, 1726) の第三部には、言語改革を論じるアカデミーの3人の教授が登場する。彼らのプロジェクトでは、会話を迅速化するために多音節語 (polysyllables) は切りつめて单音節語 (monosyllables) にして、名詞以外はすべてなくすというものであり、さらにプロジェクトを推し進めると、いっさいの単語はなくしてしまおうというものである。この描写は、当時流行し、言語アカデミー思想派が忌むべきものと考えた clipping による造語法を揶揄したものであろう：hypochondriac を hyp に、reputation を rep に、ultimate を ult に、penultimate を penult に、incognito を incog に、hypercritic を hyper に、extraordinary を extra にするのは典型的な事例である¹³⁾。

このようにして、国家権力による「英語アカデミー」設立の見込みがなくなった段階においても、辞書と文法書の編纂が英國知識人にとっては焦眉の急であったと Baugh & Cable (2002⁵: 271) は説述する。

The two greatest needs, still felt and most frequently lamented, were for a dictionary and a grammar. Without these there could be no certainty in diction and no standard of correct construction. The one was supplied in 1755 by Johnson's Dictionary, the other in the course of the next half-century by the early grammarians.

この時代の風潮をすばやく感知して、イタリアやフランスのアカデミー辞典に範をとった英語辞典の決定版の編纂を企画したのがロンドンの印刷出版業界であったことを Sledd & Kolb (1955) が指摘していることは前述のとおりであり、「ジョンソン自身は最初そんな仕事を引き受ける気はなく、本屋のドズレー (Dodsley) にすすめられた時はことわったとボズウェル (Boswell) は書き残している」¹⁴⁾。

辞書の編纂過程に窺う Dr ジョンソンの言語観 —— Johnson the Philologist ——

ジョンソンは『英語辞典』(1755) の「序文」(Preface) のなかで、“Swift, in his petty treatise on the English language, allows that new words must sometimes be introduced, but proposes that none should be suffered to become obsolete” (par. 88; 以下、引用文の下線は筆者による) と直截にスウィフトに言及し、その『提案書』を「取るに足らない論文」であると論断して、いったい何が原因で単語が *obsolete* (廃語) になるというのか、それは人々が広く一致してその単語の使用を慎むからではないのかと、言語の変化を是認する立場を披露している。

すなわち、辞書編纂を引き受け『企画書』を著わした当初は言語アカデミーによる英語の安定化を標榜したと思われるジョンソンも、『英語辞典』を現実に編纂していく過程において、国家的な言語アカデミーを設立しなくとも、良質の『英語辞典』を作成すれば英語の堕落的変化を圧しとどめることができると推測されるが、それは必ずしもジョンソン自身の思想の転換というよりは、当時の印刷出版業者側のコマーシャリズムに即した思惑であり、時代の要請であったと表現するほうが正確かもしれない。

確かに、ジョンソンの『企画書』には一瞥すると矛盾する立場が見受けられる。『企画書』の第7段落では “The chief intent of it [the dictionary] is to preserve the purity and ascertain the meaning of our English idiom; and this seems to require nothing more than that our language be considered so far as it is our own; that the words and phrases used in the general intercourse of life, or found in the works of those whom we commonly stile polite writers, be selected, without including the terms of particular professions ...” と記載して、英語を純粹なまま保ち、英語表現の意味を安定化することが当該辞典編纂の目的であることを明示しておきながら、同じ『企画書』第36段落においては “Though art may sometimes prolong their duration, it will rarely give them perpetuity, and their changes will be almost always informing us, that language is the work of man, of a being from whom permanence and stability cannot be derived.” と記して、永遠と安定を

産出することのできない人間の所産である言語は絶え間なく変化する存在であることを十分に認識している。このように、同一『企画書』のなかの記述においてさえも、ジョンソンの言語に対する首尾一貫した心的態度は窺えないように思われる。しかし、さらに一步踏み込んで考えてみれば、不斷に変化する存在の言語だからこそ、一定の歯止めがなければ、18世紀当時に腐敗堕落と考えられた変化を压しとどめることはできず、それをなすがままに放置するのではなく、基準となる何か（この場合は決定版となる辞書）が必要であることを説いているのだとすれば、『企画書』の記述もあながち矛盾する心的態度を発露したものとは断定できない。

次に、現実に『英語辞典』を編纂した後に書かれた「序文」に目を転じると、そこにはかなりはっきりとしたジョンソンの言語観を窺い知ることができる。「序文」第84段落では「この辞書の編纂に賛意を示してくれた人々は英語を固定化し、放置されてきた変化に終止符が打たれると期待していたと思うが、自分自身も最初はそうできるのではないかと思っていた」と記載し、辞書編纂開始時点においては、比較的安易に英語の規則化が可能であると想定していたことを吐露する。

Those who have been persuaded to think well of my design, require that it should fix our language, and put a stop to those alterations which time and chance have hitherto been suffered to make in it without opposition.

With this consequence I will confess that I flattered myself for a while;しかし、これに続けて「が、今や理性と経験に基づいて不可能ではないか」と思い始めている」と告白する。

But now begin to fear that I have indulged expectation which neither reason nor experience can justify.

その理由について、人間が永遠でないと同様に言語もまた永遠ではないことを踏まえたうえで、「序文」第4段落で指摘した今回の辞書編纂の苦労になぞらえ、ジョンソンは半ば自虐的に「自分の辞典が防腐処置を施し、墮落や衰退から自国語を護ることができると考えるような辞書編纂者は他人から嘲笑されても仕方がない」という。

...; and with equal justice may the lexicographer be derided, who being able to produce no example of a nation that has preserved their words and phrases from mutability, shall imagine that his dictionary can embalm his language, and secure it from corruption and decay, ...

そして、第85段落で大陸の言語アカデミーは効力を発揮できなかつたことを指摘した後、第86段落で「言語の変化は唐突には起こらないこと」“total and sudden transformations of a language seldom happen”を指摘し、第92段落で、結局のところ「この辞典編纂の目的は、死は免れないものの、長寿を英語に与えるために腐心した」ことを公言するのである。

In hope of giving longevity to that which its own nature forbids to be immortal, I have devoted this book, the labour of years, to the honour of my country, that we may no longer yield the palm of philology to the nations of the continent.

また、同段落は少し気をつけて読めば、『英語辞典』の企画には、英國民一般および他国民に対して、Bacon/Hooker/Newton/Boyle の示した科学的業績の紹介に意図があり、また（引用頻度の高いことで知られる）Shakespeare/Milton/Dryden/Pope の文学的業績に目を向けてもらいたいとする意図があったことは確かであろう。その編集方針が、広い意味では道徳的であり、アングリカチャーチ風であり、文学的でイングランド流であったことは認めねばならない。

結論として、ジョンソンの言語観には『英語辞典』編纂の最初の段階（『企画書』執筆時期も含む）と実際に編纂という一大事業を成し遂げた後に「序文」を著わした段階との間に揺れが生じたということになる。しかし、言語変化が突然に惹起しないのと同様に、ジョンソンの言語観における変化も急激に生じたものとは思われない。国家権力による言語アカデミーでは眞の意味で、野放し状態で放置された英語の変化（墮落）をとどめ、それを純化することなどできることは、大陸において先行した言語アカデミーの存在がイタリア語やフランス語の変化を抑制することができない現実を目の辺りにして意識されたものであろう。もちろん、言語が不斷に変化する存在であり、それを絶対的に阻止することなどできることは、『企画書』の段階からジョンソンの思想の底流にあったことは窺われるが、それが『英語辞典』「序文」第92段落の「死は免れないとしても、長寿を得ることはできる」とする思想に行き着いたものと考察できる。

Ascertainment の概念的意味と関連語彙の辞書的意味

Baugh & Cable (2002⁵: 257) に拠れば、英語を規範化する18世紀の試

みは次の 3 つの主項目に収斂される：① “to reduce the language to rule and set up a standard of correct usage”（英語を規則化して正しい用法の基準を樹立すること）；② “to refine it—that is, to remove supposed defects and introduce certain improvements”（英語を洗練すること—欠陥と思われるものを取り除いて、確かな改良を施すこと）；③ “to fix it permanently in the desired form”（英語を理想の形で永久に固定すること）。これらの項目を実現する簡単な方法は、“the need was for a dictionary that should record the proper use of words and a grammar that should settle authoritatively the correct usages in matters of construction” ということになる。結果として、ジョンソンの『英語辞典』が前者に相当し、後者については、ラウス (Robert Lowth: 1710–1787) の理論的英文法書 *A Short Introduction to English Grammar* (1762) がその役割を担ったと考えられる。

ところで、前述のスウィフトの『提案書』の表題にも使用され、18世紀において英語の規則化・標準化を希求する際のキーワードとの印象の強い “ascertainment” という単語はいかなる概念を表わしていたのであろうか。その語幹である “ascertain” という動詞について、現代学習英語辞典 OALD⁶でその定義を確認すると “to find out the true or correct information about something” とあり、英語辞典の決定版 OED²ではまず第 1 項に “to make subjectively certain: i.e. a person certain of a fact, or a thing certain to the mind” とあるから、「確かめる」というのが一般的の概念的意味であろう。しかし、その意味では、18世紀当時に英語の変化を腐敗堕落と考え、それをくい留めようとした人々の意図するところとは異なるのではないか。そこで、ジョンソン『英語辞典』で “ascertain” を確認すると、第 1 項に “to make certain; fix; to establish” とあり、その派生形 “ascertainment” は “a settled rule; an established standard” 「定則；確定標準」とある。その引用は、まさにスウィフト『提案書』から “For want of *ascertainment*, how far a writer may express his good wishes for his country, innocent intentions may be charged with crimes” とある。事実、OED²にも第 8 項に（廃用法表示で） “to make (a thing) certain, definite, or precise, by determining exactly its limits, extent, amount, position, etc.; to decide, fix, settle, limit” と記載され、ここにもスウィフト出典の引用 “some effectual method for correcting,

enlarging, and *ascertaining our language*" が看取される。すなわち、18世紀の関係文献に現われる "ascertain" の意味は「問題となっている事項に決着をつけること」「疑いの余地のない確かなものにすること」であったと判断される。スウィフトもジョンソンもその意味で "ascertain/ascertainment" を使用したのだということを改めて強調しておかねばならない¹⁵⁾。

それでは、英語アカデミー肯定派の文献にしばしば記載される次の単語の辞書的意味についてはどうであろうか。3種類の英語辞典の定義を比較対照してみる。

“corruption”（退廃）

OALD⁶: the form of a word or phrase that has become changed from its original form in some way.

OED²: change of language, a text, word, etc. from its correct or original condition to one of incorrectness, deterioration, etc.

Swift [Tatler, No. 320, 1710]: The continual *corruption* of our English Tongue.

Johnson's: wickedness; perversion of principles; loss of integrity.

“correct”（矯正する）

OALD⁶: to make something right or accurate, for example by changing it or removing mistakes.

OED²: to set right, amend (a thing); to substitute what is right for the errors or faults in (a writing, etc.).

Johnson's: to amend, to take away faults, in writing or life.

Pope's Preface: I writ, because it amused me; I *corrected*, because it was as pleasant to me to *correct* as to write.

“improve”（改良する）

OALD⁶: to become better than before; to make something/somebody better than before.

OED²: to advance or raise to a better quality or condition; to bring into a more profitable or desirable state; to increase the value or excellence of ; to make better; to better, ameliorate.

Johnson's: to advance any thing nearer to perfection; to raise from good to better.

“purify”（純化する）

OALD⁶: 言語に関する定義はなし。同義語は “refine”（洗練する）。

OED²: to free from blemish or corruption (in ideal or general sense); to clear of foreign or alien elements, esp. of anything that contaminates or debases. Sprat [*Hist. Roy. Soc.* I. 40, 1665]: He saw the French tongue abundantly *purifi'd*.

Johnson's: to clear from barbarisms or improprieties.

Sprat: He saw the French tongue abundantly *purified*.

これらの対照から、“corruption”（退廃）については Johnson's *Dictionary* の定義よりも、OALD⁶のほうがむしろ言語に特化した定義を施しており、さらに、OED²では当時の用法がスウィフトの引用例から明らかとなっている。一方、“purify”（純化する）については、OALD⁶には一般的な定義しか看取できないが、Johnson's *Dictionary* には明確に言語に特化した記述があり、OED²にも “corruption” を意識した定義のあることがわかる。

結局、ジョンソン『英語辞典』における “ascertain” と “purify” という語彙についての定義から、氏の辞書編纂の目的や心的態度が、破格なことば遣いや無作法なことば遣いから英語を脱却せしめて、世の中で問題になっている英語の諸問題に決着をつけるべく「英語の確定化」を試みることにあつたことは認めてよいであろう。

英国において、一連の盛り上がりと挫折以来、英語アカデミーにとって代わる組織が成立することはなかったが、結果的には、ジョンソンの『英語辞典』がある意味で英語アカデミーの役割を果たし、英語の確定化に寄与したと評価される。この現実に根ざした、上から規範を圧しつけられることを好としない英国人気質こそ、18世紀ジョンソンの『英語辞典』に比肩して評価されるラウスの理論的にして保守的かつ規範的な『小英文典』(1762, 改訂2版1763) と並んで、プリーストリー (Joseph Priestley: 1733–1804) の寛容にして実用的な英文法書 *The Rudiments of English Grammar* (1761, 大幅増訂版1768, 改訂2版1772) に人気が集まることを裏打ちするものであることを附言しておきたい。

『英語辞典』の示唆する態度 ——規範主義か記述主義か——

ジョンソンの『英語辞典』の文献学的特徴をいくつか列挙すれば、①英語辞書で初めて帰納法的語義記述方法を採用し、実際の literature のなかから多くの用例を蒐集し、文脈における意味の違いを通して語義を決定したこと——これは最初の英英辞典 Robert Cawdrey, *A Table Alphabeticall* (1604) から、ジョンソンが辞書編纂の土台とした Nathan Bailey, *Dictionarium Britannicum* (1736²) に至るまで行なわれなかつた；②それまでの辞書が旨とした難解語解説辞典の役割を捨て、日常語彙や機能語（前置詞や接続詞）の解説を重視したこと；③当時揺れのあった英語の綴り字の確定化に寄与したこと——ジョンソンの理想はエリザベス朝から王政復古までの期間の英語であったため、保守的である。その他、同じ見出し語の下に語義区分 1, 2, 3……を行ない組織的記述にしたことや、文法解説（A Grammar of the English Tongue）を載せて、文法知識の重要性を強調したことなども指摘できよう¹⁶。“oats” や “patron” の語義に辛辣な表現が見受けられ、人口に膾炙しているが、それは当該辞典の文献学的評価にはあまり関係がない¹⁷。

さてここで、『英語辞典』のもつ言語的内容とその構成を主題として考察する場合に、その中心をなす対立軸として、『英語辞典』が prescriptivism (規範主義) の立場を探るのか、descriptivism (記述主義) に立脚するのかという問題に焦点をあてることは有意義であろう¹⁸。

Barnbrook (2005) は、コーパス言語学的アプローチにより、ジョンソンが『企画書』や『英語辞典』の「序文」で明示した規範主義的目標を再検証する。ここで活用される言語コーパスの中心は、*A Dictionary of the English Language on CD-ROM*, ed., Anne McDermott (Cambridge U. P., 1996) であり、それを補完するものとして *The Diachronic part of the Helsinki Corpus of English Texts* がある。ただし、ヘルシンキコーパスにおける初期近代英語からの収録語数は 551,000 語に過ぎず、また、そのなかでジョンソン時代と境界を接する関連語彙は 200,000 語弱であるが、多様なテキストジャンルをカバーするという点で裨益するところが大きい。Barnbrook は CD-ROM 版所収の『英語辞典』初版と第 4 版を比較対照しながら、10,000 件以上の語法記述を精査して、初版の 11.3%、第

4 版の 13.9% の見出し語に何らかの語法記述が看取され、それらの約 4 分の 1 が prescriptive であると分析する。従って、ジョンソンは David Crystal が定義するところの “approach which attempts to lay down rules of correctness as to how language should be used” —— いわゆる 「規範主義的手法」 を採用したことになるが、これはジョンソンの活躍した 18 世紀当時の社会的かつ言語的背景を考慮すると、選択できた唯一当然の方法であったと結論づける [Barnbrook, p. 110]。

しかし一方で、McDermott (2005) があり、それとは対極的な見解を示す。確かに『英語辞典』の時代背景には（本稿においても何度も指摘したように）「規範」を求める風潮があり、ジョンソンはその時代の申し子であったかもしれない “the mood of the times certainly favored a prescriptive attitude to the language: Johnson was employed to produce a dictionary with the aim of fixing the language, of prescribing certain usages and spellings and of proscribing others” [McDermott, pp. 113–114] が、『企画書』から 9 年後の『英語辞典』の「序文」における記述 “do not form, but register the language” から判断する限り、果たして、期待されるような規範的態度が辞書の記述に反映されたかどうかは疑問であると懸念を表明する。事実、ジョンソンには、早い段階から、当然抱いていたであろうと一般的に思われる規範的権限の行使を快く思っていないかった様相があり “even at this early stage, Johnson seems unwilling to exercise the kind of prescriptive jurisdiction that was expected of him, and uncomfortable with the expectation that he will exercise authority in his judgements on the language” [ibid., p. 115]、その事実について、ジョンソンが著わした他の文章のなかから傍証にあたる部分を引用して証左する。結果、しばしば批判される「話すことばよりも書きことば重視の姿勢」についても、それはただ単に話すことばを記録するのが困難であるからに過ぎないのであって、むしろ、言語の実態を現わす phraseology を軽視しない視点は『シェークスピア全集』に寄せた「序文」からも窺われ、ジョンソンには「記述主義的態度」や「実際主義的態度」を認めることができると主張する。

この新奇な視点ともいいうべきジョンソンの記述主義的態度については、本稿執筆者自身による『英語辞典』の記述内容に関する精査を待たねば結論を導き出せないが、従来から定説のごとく語られる「この辞書の編纂の

趣旨が啓蒙的・規範的であるために、材料も日常生活よりは寧ろ書籍から得たものが多く、従って専門語・特殊語は除かれている。18世紀・19世紀の英語に bookish なラテン語的な言い方の多いのは彼の辞書の影響による。彼は語の善悪を判定した。これも彼の保守主義の現われである」[『英語学辞典』(研究社) から抜粋] とする解説も一面的には眞実を伝えているものではあるが、この記述を全面的に妄信して、ジョンソンが規範主義者以外の何者でもなかつたと断定するには、もう少し慎重な態度で臨まねばならないことは確かである。

結 語

本稿では、知の巨人ともいすべきサミュエル・ジョンソンの言語観を明らかにすべく多角的観点からの考察を試みた。対象が知の巨人だけあって、すぐに本筋に入ることは難しかろうと考え、『英語辞典』に直截的には関わらないが、現代英語事情と言語アカデミー思想の逆説的関係において、英国人気質の現実主義・実際主義が20-21世紀の英語の版図拡大に一役買っていることを論説の端緒とした。その後、『英語辞典』(1755) が編纂・刊行された時代背景とその事情を踏まえたうえで、『英語辞典』編纂の過程においてジョンソンの英語に対する言語観がどのように変化したのかを、編纂前に著わした『企画書』と、9年後の編纂後に著わした「序文」の記述から実証的に分析した。また、英語アカデミー肯定派の代表スウィフトの『提案書』に特徴的に使用された “ascertain/ascertainment” という単語をキーワードとして、18世紀当時の人々が英語を ascertain するというのはどのような概念的意味であったのかを『英語辞典』の定義を中心に、OALD と OED も参照して、「確かめる」という現代の一般的な意味ではなく、破格なことば遣いや無作法なことば遣いから英語を脱却せしめて、英語の諸問題に決着をつけるべく「英語の確定化を試みること」であることを明らかにし、関連語彙についても言及した。さらに、『英語辞典』編纂における立場が、規範主義であったのか、それとも記述主義であったのかについて、新しい視点を提示した。最終的には、ジョンソンは大陸の言語アカデミーに匹敵する、すなわち「40人のフランス・アカデミー会員の共同作業で半世紀近くかかってもできなかつた偉業を一人で成し遂げた」[*Gentleman's Magazine*, April 1755] “philologist” ということにな

ろう。「序文」第92段落の記述に、『英語辞典』の刊行によって「もうこれからは、大陸諸国の philology に勝ちを譲ることがないように」とある。

そこで最後に、philology と philologist について言及して、本稿を閉じることにしたい。『英語辞典』では philology は “criticism; grammatical learning” と定義されているから、「序文」における意味はそれで十分に捕捉できるであろうか。否、ジョンソンはそれほど単純化した意味で使用したのではあるまい。やはり、OED²が定義するように “love of learning and literature; the study of literature, in a wide sense, including grammar, literary criticism and interpretation, the relation of literature and written records to history, etc.; literary or classical scholarship; polite learning” の意味だと解するほうが適当であろう。OED²では Chaucer (c. 1386) が初出例である。“philology” という術語に「言語文化研究」という訳語が提唱されるのは、永嶋大典『蘭和・英和辞書発達史』(講談社, 1970) §9においてと記憶するが、その訳語の是非をめぐって、井田好治が『英文学研究』48-1 (1971) に寄せた書評に「文献学：文献として残る言語資料により、特定の国民・民族の文化を研究する学問」『国語学辞典』の定義を引用して、「言語文化研究」なる訳語の曖昧性を指摘してはいるものの、ここ15年ぐらいの間に、大阪大学に言語文化部、名古屋大学にも言語文化部という学部名まで出現して、一般的認知がかなりの程度まで進んだ印象がある。もっとも、欧州では個別言語の研究を linguistics とは呼ばずに、English philology/French- /Spanish- /German- と称している。個別言語の研究の場合には、その裏に当該の nation を意識しないでは、研究を行なうことができないからである。米国ではその限りではない。その影響を受けて、市河三喜(編)『英語学辞典』はかつては *The Kenkyusha Dictionary of English Philology* と命名されていたが、その改訂版の大塚高信・中島文雄(監修)『新英語学辞典』は *The Kenkyusha Dictionary of English Linguistics and Philology* と改名された。日本と米国では、philology は意味の狭義化を起こして、单なる「テクスト校訂やテクスト批評の文献学」の意味で使われる傾向が強いが、英国では今でもそうではなく、もっと広義に使う。18世紀の傑出した文筆家にして辞書編纂家であったジョンソンもまた、その意味において十分に philologist としての資質を備えた存在であったといえよう。本稿において、Johnson the Philologist と表記する所以である。

註

- 1) 「言語は不斷に流転する運命を持ち、時の推移とともに変遷してゆく」という至言が廣岡英雄『英文学の方言』(篠崎書林, 1965) の巻頭言にある。
- 2) Samuel Johnson の編んだ『英語辞典』(1755) の正式標題は、*A Dictionary of the English Language: in which the Words are deduced from their Originals, and illustrated in their different Significations by Examples from the best Writers to which are prefixed, A History of the language, and An English Grammar* と頗る長い。6名の助手を使ったとはいえ、実質的には独力で編まれた約4万語収録の辞典であり、初版本出版後250年間に『英語辞典』の52種の印刷版、13種の改訂版、120種の簡約版、309種の縮刷版、7種のファクシミリ版、4種の全集版、2種のCD-ROM版、さらには350点を超えるジョンソン関連書籍(含: 28点以上の詳細な書誌)が出版された。

Samuel Johnson の『英語辞典』は編者みずからの手になる改訂版は第4版(1773)と第5版(1784)までではあるが、その後も改訂が続き(第14版は1815年、Henry John Toddによる増訂版 Todd's Johnson が1818年)、OED(1928)が出版されるまではその影響は絶大であったと指摘される。Ronald A. Wells(1973)は「それ以降の100年間の英語辞書の歴史は実質的にジョンソン的伝統である」と言い、「英語の基準、英語の最高の権威としての辞書という考えがその後の辞書に影響を与えた」と書いている[小島義郎1999: 133]。従って、逆説的なことに、ジョンソンが誤って綴った“dispatch”に代わる“despatch”が英語では定着し、現在でも異形として辞書に記載されるに至った。

- 3) 1959年に Randolph Quirk が London 大学で開始した Survey of English Usage (SEU) がカード式の言語コーパス編纂の端緒であり、コーパス言語学の黎明である。実際の電子コーパスは、アメリカ英語の書き言葉100万語で構成される Brown Corpus (the Standard Corpus of Present-Day Edited American English, 1961) と、イギリス英語の書き言葉100万語で構成される LOB Corpus (Lancaster-Oslo/Bergen Corpus, 1978) の開発により本格的に始まったといえる。1990年代に入ると、データベースの大規模化が進み、British National Corpus (BNC) や Bank of English (BoE) のように、話し言葉も含めたものに発展し、辞書や文法書の編纂に貢献している。BNCはOxford U. P.を主幹とする6機関の共同プロジェクトで1994年に完成。イギリス英語の書き言葉9000万語と話し言葉1000万語を含む総語数1億語の品詞タグ付コーパス。BoEはHarper Collins社と Birmingham 大学の共同プロジェクトで1995年には当初の目標2億語を達成し、現在は5

億語を越える。資料の約70%がイギリス英語、約25%がアメリカ英語、残りの約5%がオーストラリア英語やカナダ英語。これは monitor corpus の役割を担い、COBUILD 系の辞書や文法書の編纂に活用されている。

- 4) OED 第1版の編集主幹は歴代4名で、在任期間は、James Murray (1879–1915)、Henry Bradley (1901–1925)、William Craigie (1901–1928)、Charles Onions (1914–1928) となる。その後、『新補遺』4巻本を Robert Burchfield (1972–1986) が編集し、現在の第2版に至っている。2010年には全面的改訂版 OED 第3版の出版が予定されている。
- 5) 永嶋大典 (1984) はそれを鋭く指摘したものではあるが、おそらく紙幅の関係からであろうが、Johnson の言語観に限定した記述はそれほど多くは見受けられない。
- 6) かつてラテン語は文語としての共通言語であったために、例えば、Norman Conquest (1066) 後のイングランドにおいては、征服者階層の Norman-French と被征服者階層の Anglo-Saxon(OE) が共存する triglossia の言語社会を形成した。

また、意思伝達における重要性という観点からは、Communicative Ability といえば、かつては口頭伝達（話しことば）に特化して考えられてきたが、インターネットの普及により、書きことばを手段とする即時反応型の英語運用能力も求められるようになったことを指摘しておきたい。

- 7) David Crystal (1988) *The English Language*, pp. 1–11 参照。
- 8) Kachru は World Englishes を3種類 (L1: inner circle; L2: outer circle; L3: expanding circle) に分類し、L1とL2には優位差はないとして主張する。L1には、USA, UK, Ireland, Canada, Australia, New Zealand が含まれ、話者数は約3億2000万–3億8000万人；L2には、Singapore, India, Malaysia, Philippines, Bangladesh, Ghana, Kenya, Nigeria, Sri Lanka, Pakistan 等50ヶ国が含まれ、話者数は約1億5000万–3億人を数える。また、L3には、China, Japan, Greece, Poland, Egypt, Saudi Arabia, Israel, Nepal, Zimbabwe, Russia 等多くの国々が含まれ、話者数は約1億–10億人（統計の取り方で数字のばらつきが生じる）[Crystal, 1997: 54]。
- 9) アメリカの言語学者 H. L. Mencken は、かつて *The American Language* (1919) のなかで「イギリス英語とアメリカ英語は異なる道を辿る別々の言語であり、アメリカ英語は将来イギリス英語から独立した一言語になるであろう」と記述し、英米語の分化を示唆したが、改訂第4版においては「アメリカ英語のイギリス英語への影響は顕著であるので、イギリス英語がアメリカ英語の一方言に化すだろう」と修正した。

それより以前に、H. Sweet は「一世紀も経てば、英国と米国と豪州は相互に理解不可能な異なる複数の言語を話すことになる——その理由は、発音

の変化がそれぞれに異なっていることに起因する」(1877)と指摘し、さらに遡れば、N. Webster もまた同様の点を強調して、「イギリスの英語とは異なる北アメリカ語の誕生」を予見したが、それはあたかも「ドイツ語とも異なり、また相互にも異なる、オランダ語、デンマーク語、スウェーデン語が誕生した経緯に似た“必然的で不可避の発達”である」(1789)と説述している [Crystal, 1997: 134]。

いずれの場合であっても、彼らの予測とは裏腹に、当該言語使用によって相互理解が不能になるような事態には陥らなかったのが現実である。

- 10) 引用文の訳文は永嶋大典他訳『英語史』§195参照。
- 11) Daniel Defoe (1697) *An Essays upon Several Projects*, in *Philological Essays from Dryden to Johnson*, Otsuka (ed.) vol. 11, p. 132参照。
- 12) 引用文の訳文は永嶋大典他訳『英語史』§193参照。
- 13) “clipping” は “abbreviation” と同義であり、今日では通常見かける phone/taxi/bus/ad/exam など。長い単語や表現を省略する語形成は、PC や携帯電話による e-mail の発達により、いっそう拍車がかかった。rebus techniques (b4=before/CUl8er=see you later), initialisms (afaik=as far as I know/imho=in my humble opinion), respelling (thx=thanks) が多用される傾向にある [Crystal (2004): 81]。
- 14) 渡部昇一 (2001) p. 193から引用。
- 15) Baugh & Cable (2002⁵), §189参照。
- 16) こうした従来の『英語辞典』(1755)に関する定説に対して疑義を唱えたのが、『英語辞典』出版200年を記念して上梓された J. H. Sledd & G. J. Kolb, *Dr Johnson's Dictionary: Essays in the Biography of a Book*, Univ. of Chicago Press, 1955. である。このなかで、①ジョンソンの『英語辞典』は本屋が企画したものであり、時代の要請に応えたものであった点；②ジョンソンは何の新機軸も打ち出してはいない点を論じている。これについては、渡部昇一 (1955) 「ジョンソン博士の辞書」『ソフィア』4-4 [『渡部昇一小論集成』(下巻) (2001) に再録] に詳しい。
- 17) “oats” : a grain, which in England is generally given to horses, but in Scotland supports the people (穀類、イングランドでは馬の餌だがスコットランドでは人の糧)
“patron”: one who countenances, supports or protests. Commonly a wretch who supports with insolence, and is paid with flattery (恩恵を授け、援助し、あるいは擁護する人。通例、傲慢さをもつて援助し、その代償としてお世辞をもって報いられる恥知らず)
- 18) 規範主義 (prescriptivism) はいわゆる規範文法(prescriptive grammar)を生み、それは、言語使用の規範を定め、その規則に従うべきであるとする

フィロロジスト Dr ジョンソンの言語観

立場を採る。他方、記述主義(descriptivism)はいわゆる記述文法(descriptive grammar)を生み、それは、観察に基づき言語事象をあるがままに記述する態度を採る。

参考文献

- Barnbrook, Geoff. (2005). *Johnson the Prescriptivist? The Case for the Prosecution*, in Lynch and McDermott (2005), pp. 92–112.
- Baugh, Albert and Cable, Thomas. (2002). *A History of the English Language*, 5th ed. London: Routledge.〔永嶋大典 他(訳)(1981).『英語史(第3版)』東京:研究社〕
- Crystal, David. (2004). *The Language Revolution*. Cambridge: Polity Press.
- DeMaria, Robert. (1993). *The Life of Samuel Johnson*. London: Blackwell Publishers.
- Greene, Donald. (1989). *Samuel Johnson, updated ed.* Boston: Twayne Publishers.
- Hanley, Brian. (2001). *Samuel Johnson as Book Reviewer*. Cranbury: Associated University Presses, Inc.
- 小島義郎. (1999).『英語辞書の変遷』東京:研究社.
- Lynch, Jack and McDermott, Anne. (eds.) (2005). *Anniversary Essays on Johnson's Dictionary*. Cambridge: Cambridge University Press.
- McDermott, Anne. (2005). *Johnson the Prescriptivist? The Case of the Defense*, in Lynch and McDermott (2005), pp. 113–128.
- Mugglestone, Lynda. (2000). *Lexicography and the OED*. Oxford: Oxford University Press.
- Murray, K.M. Elizabeth. (1977). *Caught in the Web of Words: James A.H. Murray and the Oxford English Dictionary*. Oxford: Oxford University Press.〔加藤知己(訳)(1984).『ことばへの情熱』東京:三省堂〕
- 中島 涉. (2001).「ジョナサン・スウィフトの英語改革案が持つ文化的意図」『上智大学文学研究』第26号, pp. 35–46.
- 永嶋大典. (1974).『英米の辞書——歴史と現状』東京:研究社.
- 永嶋大典. (1983).『ジョンソンの『英語辞典』——その歴史的意義』東京: 大修館書店.
- 永嶋大典. (1984).「語学者としてのサミュエル・ジョンソン概観」『近代英語研究』第1号, pp. 15–20.
- Nagashima, Daisuke. (1988). *Johnson the Philologist*. Osaka: Intercultural Research Institute, Kansai University of Foreign Studies.

- 大森裕實. (2006). 「書評：Jack Lynch and Anne McDermott (eds.), *Anniversary Essays on Johnson's Dictionary*. Cambridge: Cambridge University Press, 2005.」『JACET 中部支部紀要』第4号, pp. 63–71.
- Reddick, Allen. (1996). *The Making of Johnson's Dictionary, 1746–1773, revised. ed.* Cambridge: Cambridge University Press.
- Rogers, Pat. (1996). *The Samuel Johnson Encyclopedia*. Westport: Greenwood Press. [永嶋大典(監訳) (1999). 『サミュエル・ジョンソン百科事典』 東京：ゆまに書房]
- Sledd, J. H. and Kolb, G. J. (1955). *Dr. Johnson's Dictionary: Essays in the Biography of a Book*. Chicago: University of Chicago Press.
- 齊藤俊雄・中村純作・赤野一郎. (編) (2005). 『英語コーパス言語学——基礎と実践〈改訂新版〉』 東京：研究社.
- 本吉 侃. (2006). 『辞書とアメリカ——英語辞典の200年』 東京：南雲堂.
- 渡部昇一. (1975). 『英語学史』 [英語学体系13] 東京：大修館書店.
- 渡部昇一. (2001). 『渡部昇一小論集成(下)』 東京：大修館書店.
- Willinsky, John. (1994). *Empire of Words*. Princeton: Princeton University Press.
- Winchester, Simon. (2003). *The Meaning of Everything: the story of the Oxford English Dictionary*. Oxford: Oxford University Press. [苅部恒徳(訳) (2004). 『オックスフォード英語大辞典物語』 東京：研究社]